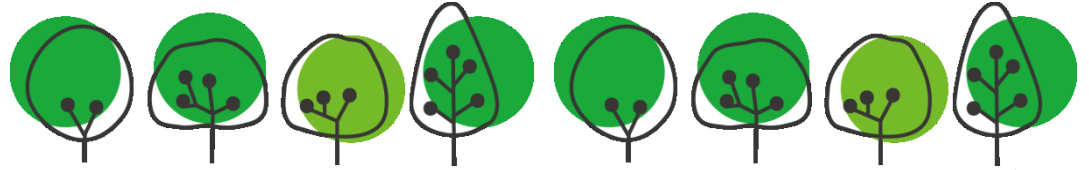




木地師のふるさと

vol.14



R6. 11 発行

木地師文化フォーラム開催！！

7月15日に木地師やまの子の家で「木地師文化フォーラム」を開催しました。当日はあいにくの天候にもかかわらず、北は新潟県から南は宮崎県まで、全国から木地師にゆかりのある方や関心をお持ちの方、130名にご参加いただきました。今号ではその様子をお伝えします。



会場の様子

当日プログラム

- 挨拶 小椋 正清（東近江市長）
- 講話 「ろくろ技術の拡大と近代産業の発展」
木村 裕樹さん
（立命館大学食マネジメント学部准教授）
- 説明 「（仮称）森の文化博物館について」
明日 一史
（東近江市企画部政策推進課
森の文化博物館整備室参事）

●近代産業製品等の展示

会場ロビーでは、今回のテーマである近代産業の発展に貢献したろくろ技術に関連した糸巻や万年筆などの製品をはじめ、足踏みろくろの一部、昔の蛭谷町での生活風景などの木地師に関する写真、こけしや独楽などのろくろを使って製作される民芸品や玩具等の展示を行いました。



民芸品の数々



足踏みろくろの一部



近代産業製品の数々

講話「ろくろ技術の拡大と近代産業の発展」

民俗学や民具研究が専門で、産業史の観点から木地師の文化について研究をされている木村裕樹先生に木地師と近代産業の発展についてお話いただきました。

■明治維新をきっかけに大きく変化する木地師を取り巻く環境

明治政府による地租改正や戸籍確定、徴兵制度等によって、木地師を取り巻く環境は大きく変わりました。良い木材を求めて移住生活をしていた木地師は、免許状に基づいた木地師の職のあり方が否定されることになり、定住生活へと変化します。

一方、明治政府によって押し進められる工業化の中、これまでのろくろ技術を応用した多様な^{ひきもの}挽物業が出現します。当時の浮世絵に西洋文化の1つである^{こつもりがさ}蝙蝠傘の柄を足踏みろくろで作製する木地師の姿がハイカラな仕事として描かれていたり、誰も作ったことがない西洋医学の医療用具である聴診器等を作った挽物工が明治時代の名工として紹介されているなど、木地師は西洋文化を受容し、技術をいかした新しい製品を作り出していたことがよく分かります。



近代産業製品の前で話す木村先生(左)

当日は、木村先生が所有されるろくろ技術を応用した様々な挽物を展示しました。日用品や講話に出てくる紡績機械の木管など、実際の挽物を手に取って見ていただき、その技術を感じていただくことができました。



紡績機械の木管



おさ
梭の中に入れる木管
(木地師資料館での展示)

■紡績業における木地師の役割

ろくろ技術が様々な活用される中でも特に紡績業における木地師の役割は大きく、木地師が日本の産業革命の下支えをした事実をもっと評価されるべき歴史です。

紡績業が日本で始まった当時は紡績機械をイギリスから輸入していましたが、その機械で糸を作るには高速回転に耐えうる糸巻きが必要でした。そこで材質を見極め、正確にろくろを挽く木地師の技術が注目され、それらの技術によって高速木管が完成し、初めて紡績機械が稼働したのです。

木管を作成する技術の中で特に重要なのが、正確にまっすぐ穴を開けることです。木管は主にブナなどの硬い材質の木で作られており、さらに部位によって特徴が異なるため、加工は非常に困難でした。現在ではドリルなどを使用し、簡単にまっすぐ穴を開けることができますが、かつては様々な加工技術によって穴を開けていました。手で加工する際には、木口の加工には「ヤリ」、板状のものには「イタギリ」という工具が使われました。また、たくさんの刃物を装着して必要な形に一気に削ってしまうという木管機も使われていました。必要な加工方法に応じて刃を取り換えて使用しています。これらの加工に用いられる刃物は全て手作りであり、木地師は鍛冶技術も持っていたことが分かります。



紡績機械「リング精紡機」



紡績機械に使われている滑車



工具「ヤリ」



木管機

■ 蛭谷町・君ヶ畑町における変化

木地師の技術が近代産業に応用される中、木地師のふるさとである蛭谷・君ヶ畑を訪れる人々も変化していきます。

蛭谷町にある筒井神社には、万年筆業関係者や紡績産業に関する企業からの奉納額があります。大鳥居には紡績木管の製造も行っている伊藤金属工業の創業者・伊藤勝三郎氏の名前、神門には紡績木管製造企業の人達の名前が記されており、木地師の聖地に多額の寄進を行っていることが分かります。

君ヶ畑町にある金龍寺には、東京の挽物師が多く名を連ねる奉納額があり、その中には有名なプラチナ万年筆という社名も入っています。多くの挽物関係者が木地師の聖地を慕い、奉納されていることが分かります。

このように、蛭谷町の筒井神社や君ヶ畑町金龍寺には、近代になっても多くの挽物関係者が訪れていますが、それは蛭谷町や君ヶ畑町からの信仰を広めるといった動きがあったことも影響しています。

明治維新以降、蛭谷・君ヶ畑を訪れる人々が少なくなり、それぞれの寺社が荒廃する中、筒井神社では「祖神講」、大皇神社では「小野宮御偉績興振会（おのみやごいせきこうしんかい）」という団体が設立され、神社・寺の復興と社格昇進のための活動が始まりました。その際、工業の進歩と殖産興業に注目し、惟喬親王の由緒を広め、新たな氏子の獲得を図ったのです。

その結果、万年筆などの近代挽物の企業から奉納があったことから、かつての氏子かりが復活したような様子がうかがえます。



慰霊碑塔



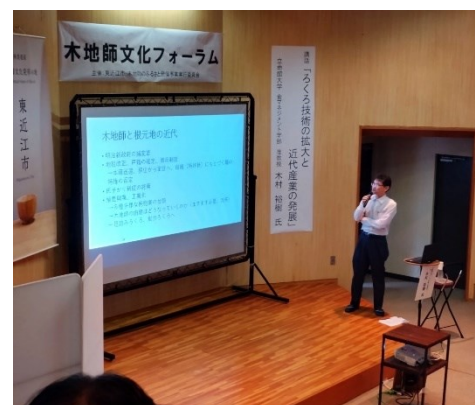
筒井神社への参拝

■ これからの木地師文化

今回の講話を通して、私は木地師文化とは何かと考えてきました。

ろくろでも旋盤でも道具は何であれ、木を削って、挽物を作る人を木地師と呼ぶことは可能だと思いますが、やはり惟喬親王の由緒という共通項が木地師文化の核になるのではないかと考えています。

本日のフォーラムにお集まりの木地師や木地師に関する研究者、木地師文化に共鳴する人々と共に、情報や意見を交換していく中で、これからの木地師文化を考えていければと思っています。



登壇された木村先生

会場にお越しの方々と質疑応答も行いました。いくつか紹介します。

● 質疑応答

Q：紡績用木管や万年筆に使用された樹種は、どんなものがありますか？

A：紡績用木管に使用したのは幹の硬いブナやミズメザクラと聞いています。木地師が使用する樹木を「六木」といい、ブナ、トチ、ケヤキ、サクラ等があります。

Q：親王講は全国的な組織でしょうか。それとも地域が限定されていたのでしょうか？

A：奉納額をみると、東京、名古屋、大阪といった大都市に集中している印象です。今後調査を進めることで他の地域のものも見つかるかもしれません。

（仮称）森の文化博物館について

現在、東近江市が計画している（仮称）森の文化博物館（以下「森の文化博物館」という）について、政策推進課森の文化博物館整備室から説明を行いました。

●森の文化博物館の目的

東近江市は面積の約56%を森林が占め、森里川湖の源流部である鈴鹿の森には、多種多様な自然と歴史文化が残されています。特に御池川の谷筋周辺は、クマタカを頂点とした森林生態系ピラミッドが存在し、木地師文化や政所茶など地域資源が凝縮された地域です。このフィールドを博物館と捉えて、森と人が共生する社会の構築を目指しています。東近江だからこそできる先駆的な取組として森の文化博物館の整備に向けて取り組んでいます。



森の文化博物館のフィールドイメージ図

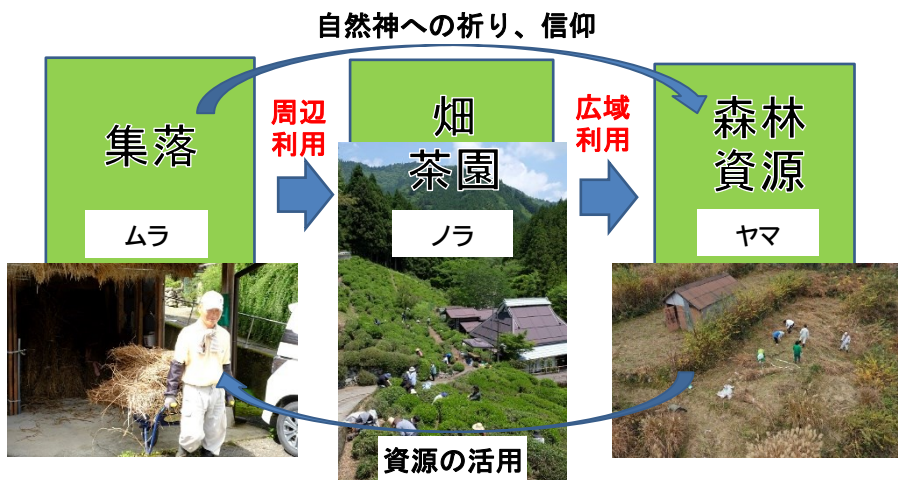
●事業内容と展示テーマ

森の文化博物館の基本理念は「森に学び 共に生きる」です。この理念に基づき、調査研究・収集保存、学習・体験、人と人をつなぐ交流事業、地域と未来を担う人づくり、森里川湖発信の5つの事業を行います。フィールドの様々な地域資源をめぐり、体感・体験してもらう事業を実施します。拠点施設では、「森と人との関わり」をコンセプトに、山の暮らしの中心にあった集落空間、周辺の茶畑や茶園空間、自然や山々の広大な空間、3つの空間に着目して新たな展示を行います。

●今後のスケジュール

森の文化博物館の活動拠点となる場所は、地域資源とのアクセスの結節点、一定の施設インフラが整っていることなどを考慮し、木地師やまの子の家を想定しています。

令和10年度の開館を目指して、自然や歴史分野の調査を進め、信仰や暮らしの中で森の資源を上手く利用し、森と共に生きてきたことを伝える展示や体験プログラムづくりに取り組んでいきます。



森の文化博物館での展示構成イメージ

木地師のふるさと 東近江市

発行：東近江市企画部企画課

〒527-8527 滋賀県東近江市八日市緑町10番5号

TEL（代表）0748-24-1234（直通）0748-24-5610

FAX 0748-24-1457

Email kikaku@city.higashiomi.lg.jp

Facebook <https://www.facebook.com/higashioumi.kijishi>

（Facebookでは随時、お知らせ等を行っています！！）